



ここは、日本。

オーストラリアにあるパースから日本に帰省した連中は、ある場所へ集まっていた。

「何時まで経っても、日本は暑いなあ...」

「そうだね、ジメジメと湿気多いし...」

「カラッとした暑さなら良いんだけどな...」

「こういう所に20数年も住んでたんだよな...」

「あー...、暑い、暑い...」

「体格が良いと、益々熱っぽくて暑そうだな...」

「黒とか銀とか関係なく毛の先っぽまで暑いよな...」

「どこの位置でも、暑いのは同じだろ」

「いや、パースは、というより南半球は冬だっ」

「あー...、戻りてえ...」

そう言った途端、何かが上から降ってきた。

雨では無い。

もちろん、スコールでも無い。

水だ。

「誰だっ、こんな事しやがるのはっ」

「煩いっ！お前等は、何のために日本に戻ってきたんだ？」

「そりゃ、誰かが帰省するって言うから」

水を掛けた相手は、一気に返してきた。

「スズメ、そんなに暑ければ、とっととオーストラリアに戻れっ！

カズキ、そんなにジメジメが嫌なら、オーストラリアに戻れっ！

サトル、カラッとした方がいいのなら、日干しにしてカラカラにしてやろうかっ！

マサ、感慨深く言うほど年寄りになったのかっ！

ジュンヤ、お前は夏なのに長袖を着てるからだろっ！

ユタカ、体格が細い事を強調してるのなら、もっと食って豚になれっ！

タカ、体毛は、その地域の独特なものだ。日本では日が熱いから黒髪が一番なんだっ！

ワン、どこでも良いのなら、香港に戻れっ！」

「ユウマは、暑くないのか？」

「北海道だから涼しいと思わない事だな」

そう、この連中は北海道に来てるのだ。

「それはそうと、帰省すると言っていた人は何処に居るんだ？」

スズメの、その言葉に溜息を吐いたユウマは言ってやる。

「網走だ」

次はカズキが聞いてくる。

「網走って、何があるの？」

誰が言ってやるもんか。

だから、ありきたりな言葉を返してやる。

「監獄があるんだよ」

「それ位知ってるよ。ボスが監獄に用がある筈ないだろ」

だが、マサは、その言葉で正解を口にした。

「まさか、ロシアに行ったのか？」

その言葉に、ユウマ以外は驚いた。

「え、ロシア？」

マサは、ポツリと呟いている。

「この時期限定のロシア行きがある。それに、あのクマヤローはロシア語が出来る。

あの二人は、ロシアに行く為に網走に行ったんだ」

「それじゃ、この北海道に来たのは、それが目的？」

「あんの野郎...」

ユウマが、仕方なく口を挟んでくる。

「見当違いな怒りだな」

「何がだ？」

「ボスは、この春、ここに来た時に言っていた。

そのボスに勝手に付いてきたのは、何処の誰らだ？」

ユウマの、その一言に皆は黙ってしまった。

確かに、ボスは二人だけで帰省するつもりだったらしい。

同行者は、例に漏れず博人だけだ。

マサは、自分も一緒に行くつもりだったのに、声を掛けてくれなかったのだ。

今迄は、自分も一緒だった。

日本に着いてからは、クマ野郎がボスと行動を共にして、マサは親の家に戻っていた。
それでよし、とっていたのだ。

クマ野郎は強いからボディガードにもなるからだ。

日本に着いてから1週間経った。

何処で何をしてるのだろう。

ボス。

私は、もう用無しなのか...？

皆が皆、押し黙ってしまった。

スズメさえもが黙ってしまったので、お通夜みたいな感じだ。

そのスズメが、口を開いてきた。

「分かったよ。何時までも、ここに居て悪かったな。それじゃ、2, 3日ほど留守にする」

「どこ行く気だ？」

「私の生まれ故郷は新潟だ」

「あ、今度こそ本物の帰省か」

「ああ、こっからだとな新幹線に乗れば2時間程で家に着くかな」

「近いな」

「そうだよ、姉ちゃんや義母弟達に会ってくる」

「父親じゃないのか？」

「とっくに死んでるだろ」

じゃ、な。

そう言って、スズメは札幌を後にした。

だが、他は東京近辺で、ユタカは福岡、ワンは香港だ。

スズメが居なければ、静かなものだ。

ユウマは、残りの7人に手伝わせることにした。

それは、有無を言わせない口調だった。

牧場の手伝い。

病院の手伝い。

どちらかを選べと言われ、ワン、カズキ、タカは迷わず病院の手伝いに立候補した。

ジュンヤ、マサ、サトル、ユタカの4人は牧場の手伝いだ。

病院の手伝いとは、オペもやれば診察もする。

だから、まだ良い。

問題は牧場の方だ。

4人とも馬や牛に跨り鞭を揮って乗り回すのならお手の物だが、餌やりとか世話は無理だ。

いや、でもユタカがやっている。

そのユタカを見て驚くが、3人は同じ様に思っていた。

（意外な奴だな…。こいつは、何処でやってたんだ？）

ユタカの上してる事を見様見真似で、3人は同じ様にやっていく。

それを窓から見ていたユウマも同じ様に思っていた。

一方、渦中の人には東京に居た。

長崎で墓参りを済ませ、福岡に住んでいる姉一家と過ごし、その翌日は東京に行き墓参りを済ませた後は弟と過ごし、北海道のユウマに連絡を取っていた。

「そっちはどうだ？」

「スズメは新潟に帰省して、残りは私のを手伝わせている」

「そうか、明日そっちに戻るから」

「ん。気を付けて」

「ありがと」

この時期は、どこもかしこも暑い。

だが、夏生まれの友明は暑いには慣れている。

春は桜を見に、日本一周した。

この夏は、ロシアで5日間を過ごし、長崎と福岡で2日間、東京で2日間を過ごした。

残す事、1日間だ。

スズメは帰省してるのか。

あいつが北海道に戻ってくるのを待つのは無理だな。

言っておいた筈だ。

「10日間の休みで、11日後の午前中にパースへ戻る」と。

それに、勝手に付いて来たんだ。

恨むのなら、自分を恨めよ。

そう思ってる友明を乗せたジェットは、今度は函館に向かった。

函館に着くと、ユウマが迎えに来てくれてるのが目に映る。

「お帰り」

「ただいま。土産は後で渡すからな」

「ありがとう」

ユウマの車に乗ると、博人さんが運転したいと言い出すが、それを素早く却下され、大人しく後部座席に押し込められてしまう。

ボスは、それをクスクスと笑って見てる。

そんなボスを見るのは初めてなので、ユウマは嬉しかった。

「博人さんは、本当に運転魔なんだな」

「北海道の道は飛ばしやすいからな」

30分もすると、ユウマ家に着いた。

牧場では、4人の姿が見える。

それをユウマが説明してくれる。

「競馬の馬ではないのに、4人とも乗りたがるんだよ」

「楽しそうで良いな」

「乗ってみる？」

「良いのか？」

目がキラキラと輝いてるボスに、ダメとは言えなかった。

荷物を広間に置き、ユウマは二人を馬屋に連れて行く。

博人は、自分で鞍を乗せて跨る。

ボスはユウマに手伝って貰い、跨る。

「へー…。視界が広いし、遠くまで見えるんだな」

「ゆっくりと歩くから」

そう言うと、博人さんは馬の脇腹を蹴り、馬を走らせた。

「あっ…」

「ったく、あの人は暴れ野郎かよ」

ユウマの、その言葉にボスは笑ってる。

「あははっ…。嬉しいんだろうな」

「ボスも、慣れると走らせると良いよ。でも、最初は徒歩だからな」

「はいはい」

馬と同化した博人は、4人の居る所まで走らせる。

いきなりの乱入に驚いた4人だが、もしかしてボスも？と期待して振り返って見ると、ボスが馬に乗ってユウマが手綱を握っているのが見える。

思わず、ボスの方に行こうとしていた。

ら・・・、

いきなり馬が暴走しだした。

「う、うわっ…。こら、待て。おい、乗ってるのは私だっ！！！！」

そう、博人の馬が先陣を切って勢いよく走ってるから、他の馬も倣って走り出したのだ。自分達の上に跨ってる人物を無視して走り出したのだ。

そして、肝心のボスが乗ってる馬も走り出そうとしてる。

が、ユウマが手綱をしっかりと握っている。

「ドウドウ……。落ち着け、お前は走るな。歩くんだ、ある・・・、ってえ」

その馬が、主であるユウマを蹴ったのだ。

その瞬間、手が緩み、馬は走る。

「ボスッ！しっかり捕まっててっ！」

「言われなくてもっ」

6頭が札幌から飛び出し、途中からユウマとタカが乗った馬も追いつき、8頭は帯広から釧路、根室へと走り出す。

辿り着いたのは、根室にある納沙布岬だ。

「あー...、驚いた」とマサが。

「ビックリしたよ、目の前をボスが馬に乗って走ってるんだから」とタカが。

「ユウマ、ちゃんと調教しとけよ」とジュンヤが。

3人の言葉にユウマは、こう返した。

「馬に言ってくれ」

ユタカはボスに声を掛けてる。

「ボス、お帰り」

「ただいま。てか、乗馬だなんて初めてだよ」

その言葉に、サトルが言ってくる。

「初めてで走らせるのか」

こういう元を作った張本人の博人は、海の向こうを見ている。

太平洋を挟んだ向こうはアメリカだ。

「でも、気持ち良いな」というボスの呟きが聞こえたのだろう。

誰かの言葉が返ってくる。

「うん、そうだね。さっきまでの暑さが、どっかに吹き飛んでったな」

ユウマの声が聞こえてくる。

「少し行った所に噴水がある。あそこで馬を休ませ水を飲ませよう」

その言葉で、皆は馬を進めた。

友明は博人の事が気になり、近くに寄っていく。

「博人さん？」

「大丈夫だ。すっきりしたから、もう大丈夫だ」

「本当に大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だよ。悪かったな、急に走らせて」

自分の方を向いた博人の表情は、言葉通りすっきりとしていた。

「でも、博人さんが馬に乗れるだなんて知らなかったな」

「小さい頃は乗ってたぞ」

「え、そうなの？」

ドイツに居たからな。

そういう呟きが聞こえ、友明はオーストラリアで馬を数頭飼おうかとも思いだした。

やっぱり、車より馬が良いなという博人の呟きが聞こえてくる。

それもそうだな、事故も起きないだろうと思い、友明は口にしていた。

「それなら、パースで馬を数頭飼おうかな。でも、餌とか世話は乗る人がする事」
その言葉に博人は頷く。

「それは良いな。ドイツに居た頃は毎日の様に世話をしていたから。そうだな...、白銀も良いが、栗毛の元気一杯な奴が良いな。」

それを聞いていたユウマを除いた5人は、（え...！パースで馬を飼うのか？）と、もう馬はごりごりだと思っていたのを、ボスと博人は知らない。

しばらく休憩して、札幌のユウマ家に戻り着いたのは18時近くになっていた。

「どーこーに一」

「行ってたの？」

不機嫌そうな声と表情をしているのは、病院組のカズキとワンだ。

その二人に、ボスは応じる。

「ただいま」

「あ、お帰り」

「土産を買ったんだ」

あ、先ずはこれな。と言って、先に手渡した先はユタカだった。

「え、私が一番？」

「うん、渡して欲しいと言われたんだ」

へえ、誰からなんだろ...とガサガサと包みを開けると、誰なのか分かった。

「ちょ、これって...」

「渡したからな」

そう、福岡に住んでるユタカの父親からの物だ。

あれから父とは会ってないし、会おうとは思ってなかった。

既に死んでいてもおかしくはない年齢だ。

なのに、友明は会いに行ったんだな。

友明はユタカに渡すと、今度はロシア土産を皆に渡した。

で、口を開いてくる。

「予定通り、明日の午前中にパースへ戻るからな」

「Yes」

で、友明は一つをユウマに渡した。

「これは？」

「今、ここに居ないヤツに渡しといてくれ」

その言葉で、ピン！ときたのか、ユウマは言うてくる。

「2, 3日って言ってたんだけど」

「明日の朝に戻ってくる、と確約ではないだろ？」

「昨日の朝に帰省したから、明日の午前...は、どうだろう...」

「なら、早くて、明日の夕方だな。あいつにもそうだが、言うてあるんだ。

10日間の休みだけど、11日目の午前中に帰る、とな」

「明日、だね...」

「ああ、そうだ」

「やっと着いたー」

出迎えてくれたのはユウマだけだった。

まあ、ここの主人はユウマだからな、ユウマだけでも良いんだよ。

「スズメ...」

「ん、何？」

「お前が悪い」

「ほえ？」

ユウマは、スズメに何かを渡しながら言う。

「カズキがメールしただろ？」

「これって何？」

「ボスからの土産だ」

「ロシア土産か...」

「スズメッ」

「だから、何だよ」

凄く言い渋ってる表情でユウマは言う。

「...皆、戻った」

「何？どういう意味？」

「今頃は沖縄辺りだろう」

「えっ...？」

「カズキがメールした筈だ。返事も着たらしく、見せてくれた。

なのに、肝心のお前が、こんな時間に」

「ちょ、ちょっと待てっ」

スズメは、自分のスマホを取り出しメールアプリを起動する。

カズキからメールが入っており、返信もしてるのを確認の為に見てみる。

「早く戻っておいで。予定通り、明日の午前中にはパースへ戻るよ」
という文面に、返信をしている。

『分かった。午前中には戻るから』
という言葉に、再度メールがあった。

「朝の11時59分59秒までしか待たないから、と言ってるよ」

今は？

腕時計を見ると、時間は午後0時10分だ。

あ、あの連中はあ……………！

さあっ…と、顔が青ざめるのが分かる。

すると、南に向かって走り出した。

「嘘だろ…！おーい！戻って来ーい！！」

そんなスズメに、ユウマは言ってやる。

「馬をやる。それに乗って帰るんだな」

「馬だなんて、何ヶ月掛かると思うんだ？」

「2週間も掛からん。それに、ボスは馬を飼おうと思ってるから、返してくれなくて良い」

「え……………！！」

昔から、こいつは冗談は言わない生真面目で勤勉な奴だ。

それが、馬に乗って帰れ、だなんて…。

そのユウマが言うてくる。

「時々休憩を入れ乍ら、綺麗な水を飲ませ、草を食べさせてれば、大丈夫だ。

スズメ？聞いているのか？」

「お前、それマジで言ってるのか？」

「でないと、お前はパースに戻れんぞ。もしくは飛行機で帰るんだな」

もちろん、パスポートは持って来てる。

出入国の印鑑もパースと日本の両方が押印されてる。

行きはジェットで来て、帰りもジェットの予定だった。

それが、馬か飛行機で帰れだって？

たったの10分じゃねえか。

「んのヤロー！たったの10分じゃねえか。待ってくれても良いだろっ」

そう喚くスズメに、ユウマは何かを見せてくれた。

それには、こう書かれていた。

『スズメこと、ヨウイチ君へ

土産はユウマに預かって貰ってるから、受け取るんだな。（ボス）

うー、わあ。やっちゃったねえ…。(サトル)

こういうのは堪んないよねえ…。(マサ)

暑いのも嫌だけど、怪談話しも怖いのがあるけど…。(ユタカ)

こういうのが、一番怖いよな。(タカ)

御愁傷さま。(ジュンヤ)

なんとか言って、pm 0時5分0秒まで待ってたんだよ。(カズキ)

それか、自費でパースに戻ってくるんだな。(ワン)』

しかし、ワンの次に書かれてある一文を見てスズメは叫んでいた。

「あ…、あんのぉ…、クマヤロー！！」

「くそったれえ...、あんのクマヤロー.....！」

ユウマは、呆れかえった表情で言う。

「いやあ、でもよく頑張ったね。さすがスズメだわ...」

「ふんっ、誰だと思ってるんだよっ」

「さすが右腕だけあるねえ」

この言葉は、心底思っていた言葉だった。

「じゃ、戻るな。2年間世話になったな。ありがとう。んで、悪かったな」

「いやいや、良いよ。

それに、うちの皆元気だし。この調子でパースでも頑張れよ」

「ああ、サンキューな。皆によろしくっ」

「そっちこそ、よろしく伝えて」

スズメはほくそ笑んでいる。

誰にも何も言わず、連絡も取らなかったのだ。

ふふふっ....。

さあ、コバルト君。

行先はオーストラリアにあるパースだからな。

一緒に、行こうな。

スズメは栗毛で元気一杯なコバルトと銘打った馬に綱を巻き、自分の乗る黒毛の馬に跨った。

「コバルト、続けよっ」

「ヒヒヒーンッ」

その元気そうな声を聞き、スズメは黒毛の馬、チャイに鞭を打つ。

「じゃな、ユウマ。元気でっ」

「ああ、気を付けろよ」

「行くぞ、お前等っ！」

まずは、香港だ。

海路を取り、ワンの実家へ、馬を引っ張って行く。

ミスターの、あの驚いた顔。

澄ましたマフィアボスの顔が、驚きに満ちて目も見開いていたのが見ただけでも嬉しかった。もう、堪らんかったわ。

そして、大陸の陸路を取りシンガポールへ。

お次はパースだ。

結局、1週間後にはパースへ着いたのだった。

そろそろかな、と思ってたユウマはパースに居るカズキにメールを送った。

メールを開いたカズキは、その文面を見て驚いてる。

「は？なにこれ？」

しかし、マサは公道で見かけて驚いていた。

真っ先に見て、頭が真っ白になっていた。

ブルブルッ...

黒毛の馬を見ると、あの頃を思い出す。

そう、フランスに居た頃をだ。

そこで気が付き、クリニックに入って行った。

「た、大変だー」

マサの慌てふためいた声に、皆が何事、と思い集まってきた。

だが、マサの口から出てきたのは言葉になってなかった。

スズメばかりで、何の事が分からないので喝を入れてやると、やっと言葉になった。

「スズメが、ケンタウルスに」

だが、皆には通じてなかった。

「何言ってるのか分からない」

それと同時に、元気な声が響いてきた。

「たっだいまー！」

げ、この声はっ...

皆が集まり見ると、スズメが2頭の馬を引き連れて戻って来ていた。

マサは言ってくる。

「ほらな、スズメが、ケンタウルスに」

「マサ、それ言うとケンタウルスに失礼だぞ」

静かで良かったのに…。

ああ、4年振りに、また賑やかになるのか…。

馬を裏庭まで連れて来て、スズメお得意のお喋りタイムになった。

要約すると、なにやらクマヤローの文章が引き金になったらしい。

『日本でカンフーとか八卦掌の腕を磨けば？』

その言葉には、ただパースには戻ってくるな、という意味が込められてる。

それをスズメは感じ取ったのだ。

伊達に、大学時代6年間をずっと右腕に居座ってたわけでない。

そして…、その言葉に触発され、スズメは獣医の資格を取り、馬や牛のみならず犬猫等も扱うエキスパートな医者になったのだった。

本人曰く、「打倒！クマヤロー！！」だそうだ。

なるほど、クマは獣類だから、どちらかと言うと獣医が必要だな。

獣医のクリニックを開きたいと言って、エドに連絡を取っていたらしい。

エドの病院に獣医クリニックが出来上がったのは、そういう事だったのか。

が、しかし敵は強し。

獣医の資格を持って、カンフーや八卦掌に磨きを掛けて戻ってきたスズメの拳等は、クマヤローに当たる事はなく、3発目にコテンパンにされてしまっている。

いや、でもタイマンでそれだから、少しは上達したのだろう。

クマヤローの言葉は、これだった。

「4年間を静かに過ごしていたのに…。でもまあ、1cmは上達したみたいだな」

こんのクマヤロー……。

ボスは、栗毛で元気一杯な馬に『Lotti』（ロッティ）と名付け、博人と世話をしていた。
そして、メルボルンとかシドニー等の反対側へ散歩するようになったのでした。

～Fin.